研修報告

二十七年度日帰り研修
大師庵・るいさの墓
長昌寺を訪ねて

はじめに

今回の日帰り研修は、宇目・直川方面の西南戦争関連史跡を訪問する予定でしたが、前日来の雨でぬかるみ、急遽宇目町内の遺蹟を訪問することになりました。

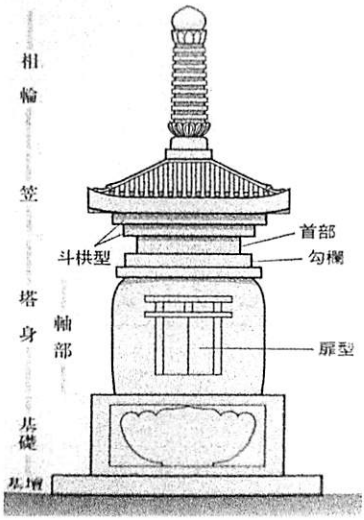
コースは、宇目町塩見の大師庵跡、重岡のキリシタン墓「るいさの墓」、佐伯市の西南戦争発祥の地「長昌寺」八幡河原の庚申塔群、木浦名水館を廻りました。講師は宇目在住の柴川英敏さんにお願いしました。

参加者は二七名、九月十八日九時、佐伯市総合庁舎前をマイクロバスで一路講師の待つ宇目B&G海洋センターに向け出発しました。車内で小野会長さんより「宇目町は昔、大野郡に位置づけられ竹田岡藩の領地であったという事、重岡のるいさの墓には多くの人が訪問している事、同名のお菓子がある事」等のお話しを聞きました。

一、塩見大師庵宝塔・延命地蔵

塩見大師庵宝塔は、宇目町塩見園黒岩峠の大師庵の前庭にある石塔で、弘法大師空海が広めた密教系のものです。

向って左手の塔身には貞和五年（一三四九）丑巳十月廿八日と北朝の年号が彫られています。この為この塔が建てられた頃この附近は北朝側の一族が領していたと考えられます。



この「塩見大師庵宝塔」について昭和五十一年三月三十日、県指定文化財になった時、宇目教育委員会が作成した説明板があります。その全文を紹介します。

この塔は凝灰岩で出来ており、総高二〇〇センチの壮大で中央色豊かな宝塔である。塔身は高さ五三センチ、径六一センチで雄大な中にも安定感があり、地方の宝塔の形式と相対時し中央色豊かな事を示している。

この塔の基壇の上に基礎を建て、その基礎の四面には見事な格狭間が彫られている。格狭間の曲線は左右に強く張り出しており、肩のあたりからの曲線はゆるく膨らみを持ち、おおらかな中にも上部の重さを支える力強さが表れている。笠石の軒の厚さ、反り花や軒両端の線は時代を良く反映し、露盤、伏鉢、請花は特に良く優雅に出来ている。しかし、見ての通り二基とも相輪中部から上を欠損しているのが残念でならないこの塔の特徴は、基壇上部四面に彫られた反り花であるが、全体的に彫りは深く各蓮弁の形に丸みをもたせ、各弁を両側から押し上げるようによくまとめている。彫り形も丁寧で上部の重さに対してよくバランスが取れており優雅さが浮き出ている。

中央には貞和五年（一三四九）丑巳十月二十八日と北朝年号が刻まれている。貞和と言えば足利尊氏や楠正成等が南北に別れて戦った南北朝時代であるが、同年代の宝塔としては大分県はもとより、九州各県にもこの宝塔の右に出る塔は稀有のことから貴重な文

化財である。

ところで宝塔という言葉は「珍宝で飾った塔」という事で塔の敬称及び美称である。仏教では塔の事を宝塔と言っているが、ここで言う宝塔とは、方形の基礎、首部のある塔身、その平面は円形であるのが特徴で、笠は四柱状で、其の上に相輪あるいは宝珠を置いた形式のものを言うのである。基礎と笠は平面が四角であるが六角、八角もある。

石像宝塔は、もともと木造建築の宝塔の構造を簡略化したもので、このように塔身に首部を作り出し又小穴を穿って納経などが追納されるような構造になっているのも見受けられる。また、華やかに装備され基礎も数段重ねており、基礎の上には反り花座を刻み、その側面には格狭間を彫り出しているものもある。笠蓋の上に大型の請花を置き相輪には火焔宝珠を頂く形式の物が多数を占めている。

鎌倉時代以降全国各地に流布伝播して盛んに各宗派とも造立したが、時代が下がるにつれ又地方により、その形状もまちまちになり、地方色豊かな宝塔も造立された。さらに逆修供養（生きているうちから死後の往生菩提を祈って行う仏事）が盛んになり、逆修供養塔として宗派を超えて造立された。

（宇目町教育委員会）

このように宝塔の形は地方により、時代により変化しています。格狭間の形により時代がわかるそうです。江戸時代になると「蓮弁」の形から「蝙蝠型」に変わり、より複雑な形を示してきます。

この石塔の基となる石は、阿蘇の凝灰岩で水はけの良い石です。その為石に文字が書きにくく、V字に彫り込む「薬研彫り」で刻まれています。塔の中央の塔身には骨などが納められているそうです。

大師寺の近くには、「大乗妙典一字一石塔」や「邪鬼を踏みつけた石像」や庚申塔等が点在していました。

石塔は蒲江の方にも多く見られるそうですが、多くは四国を経由して購入したものであろうと言われていました。

私たちは次にキリシタン墓「るいさの墓」に向かいました。

二、キリシタン墓「るいさの墓」

大正初期、渡辺良策氏が杉の植林をしようとして発見されましたが、その異様さに驚き埋め戻し再発見されるまで四〇数年を要しました。

この墓は、凝灰岩質平型の伏墓で、長さ一八〇センチ幅八六センチ、高さ二二～二七センチという巨大なものです。手前の軸部に「元和五年」「るいさ」「正月廿二日」の文字が見えます。

この「るいさ」という名前は、キリスト教に入信し洗礼を受けた時にもらう名前です。ですから、当時は本名はわかりませんでした。

大分大学の故半田康夫教授が、渡辺家所蔵の「渡辺氏系書草案」や同家の位牌や墓碑から推測して、宇目郷割元役渡部善左衛門重福の妻、岡藩士渡辺与吉郎の娘ではないかと結論づけています。

というのも、この善左衛門重福は、後に宇目郷惣支配深田弾右衛門宗円の娘を後妻にもらい受けています。この後妻や子ども達の位牌や墓がきちんとあるのに、先妻の位牌、墓が存在しないからでした。

この「るいさの墓」は、昭和三四年に県指定文化財に指定されています。今でも毎年多くの人が訪問するそうです。

キリスト教関連遺蹟は一昨年来の「マレオ・マレガ

文書」のバチカン市国発見のニュース以来多くの人が関心を寄せています。

当時はキリスト教に対する弾圧が次第に厳しくなってきており「踏み絵」なども行われるようになってきています。宇目郷でも岡藩の中心地竹田から「板踏み絵」「真鍮踏み絵」を持ってきて実施していた事が「踏絵紀行」という本に書かれています。

キリスト教の弾圧は初めは宣教師の国外追放程度で一般の信者には、あまり厳しくなかったようです。これだけの大きさのキリシタン墓を作るには、それを作る石工や命令する人、石を切りだす人、運ぶ人が必要で、それらの人々もキリシタン関係者であったことが考えられます。言い換えれば一地区全体がキリシタンであったとも言えるわけです。

マレオ・マレガ神父がいた初期の頃は、踏み絵を実施しても後にキリストに「お詫びのミサ」を済ませたり、キリスト教徒であっても、どこかのお寺の者にし見て見ぬ振りをしていたという話も残っています。

しかし、神父がいなくなると弾圧は次第に強まり、檀家制度という、どこかの寺に位置づけられる制度に組み入れられるようになりました。いまの檀家制度の始まりです。また、仏徒に変わる人（転ぶ・改宗）も出てきます。教えを紙に書いて持っているだけでも罰せられます。ですからキリスト教関連の出来事は口伝として伝えられてきました。るいさの墓も、このような時代の中に次第次第に埋没されていったものと考えられます。

宇目はこの当時「宇目郷四千三百石」と呼ばれ大庄屋二人により統治されていました。その役職を深田氏と渡辺氏が担っていました。

るいさの墓が作られた元和年間、宇目郷大庄屋の一人渡辺氏が罷免され、乞胸（ごうむね）の養子となっていた渡辺大庄屋の弟が朝地町よりもどり宇目大庄屋になっています。

アンドレアクロス

これがキリスト教弾圧に関わりがあるかどうか不明ですが何らかの関連があったと考えられます。るいさの墓の表面には「アンドレアクロス」の印が彫られています。

アンドレアクロスというのは、キリストの弟子、アンドレアがこのような形のクルス（十字架）で殉教したことから付けられるようになった印です。今では「アンドレ」と言う名前の装飾品として使用されています。また伏墓の上部に四角い穴が彫られています。そこに十字架が立てられていたと考えられています。

私たちは、「るいさの墓」の見学を終え長昌寺に向かいました。途中に「宇目型宝篋印塔」と呼ばれる石塔が数基、地区の共同墓地に建てられていました。

この宇目型宝篋印塔は、宇目各地にみられる素朴な石塔で、基壇・基礎・塔身・笠・相輪からなる阿蘇溶結凝灰岩（灰石）で作られています。他の市町村には殆ど見られません。塔身に金剛界四佛の種子が印刻されています。

高さは一三八センチしかありません。この塔の特色は伏鉢と請花が一体化している事、九輪は寸づまりの中ふくれである事、又、宝珠も請花と一体化し、笠の隅飾り突起が簡略化されています。このように宝篋印塔の原型から逸脱しているのが大きな特徴と言えます。

四、長昌寺とキリシタン墓

この寺は臨済宗妙心寺派のお寺で、突出した高台にあります。寺から南の方を見ますと西南戦争で有名な赤松峠が正面に見えます。

このお寺は明治十年（一八七七）の西南戦争の際、重岡仮分署（警察）のあった所です。佐伯地方で始めに西郷軍が攻撃してきた場所です。

江戸時代、町奉行所や郡代（郡奉行）などの藩役人と住民の自治組織である町年寄、惣庄屋、大庄屋、肝

煎、組頭等の町村役人が五人組制度を活用して町村の治安維持に努めていました。

明治当初、地域の警察制度は幕末の組織を踏襲し、町奉行・郡代は市政主事、牧民幹部、治民局と改称され、惣庄屋・小庄屋は町年寄・惣里正・里正と替えられ運営されていました。

明治五年二月、県の支庁が佐伯に置かれ警察業務が行われる様になりました。同八年十月には県に警部一二名が配置され、大分市に第一警部出張所が設置されました。県下の巡査は二四名になりました。

明治九年二月、佐伯村に第五警部出張所が設置され、同年十二月に海部郡波寄村、同津久見村、同蒲江浦に屯所が置かれました。明治十年二月には警部出張所が佐伯警察署となり屯所が分署となりました。分署は蒲江、下直見、津井、津久見、千束の五ヶ所になりました。県下の巡査は四二名に増員され各出張所に六名　各屯所に二名の巡査が配置されるようになりました。この長昌寺が千束屯所（重岡仮分署）です。十年一月県下の巡査が一四八人に増強されました。

二月西南戦争勃発。西郷軍は熊本に進軍、五月熊本での戦いで敗北した西郷軍は人吉で編成替えし北上、五月十二日朝、野村忍助旗下第二、第四、第八、第一二中隊一六〇名が侵入、重岡仮分署を攻撃しました。この時、屯所には三月に赴任したばかりの臼杵出身の藤丸宗造警部以下三〇余名がいましたが衆寡敵せず離散してしまいます（死亡一・捕縛一）。藤丸警部は西郷軍の動静を調査、竹田警察署及び阿蘇の熊本鎮台本部に報告します。警部はのち捕らえられ二三日竹田町にて処刑され、竹田市西光寺一九世住職純英上人がこの死を悼み山手に葬りました。現在、境内に藤丸宗造の碑「就義碑」が建立されています。毎年、佐伯・竹田両警察署が慰霊祭を行っているといいます。

これより先、宇目地方は六月二一日まで西郷軍との戦いに明け暮れます。その後は官軍の本営となり八月二八日まで戦いが続きます。

当時の記録として、

・明治十年二月、西南戦争勃発直後、重岡仮分署に「脚力壮健な者を配置する」との通達が出されています。何かあった場合、走って知らせる役人です。

・三月には重岡仮分署に下直見、津久見分署の巡査を移動させ、一六日には県より小銃二〇丁弾薬六〇〇発が送られて来ています。警察日誌には「西郷軍から地区民を守るために使用する事。構えて戦うことに使用しないように」との注意事項がついていたそうです。

長昌寺（重岡仮分署跡）で説明する柴川英敏副会長

このように長昌寺は西南戦争の一戦場として位置づけられています。この戦いで戦死した官軍の兵士一五二人のお墓が佐伯市岡の谷の招魂所に祀られています。墓碑名を見ると（東京警視隊の人々も含め）大半は大分県外の人々でした。この長昌寺や大庄屋の家には、中隊長乃木希典（まれすけ）や縣令大山巌、熊本鎮台谷干城が宿泊されたと伝えられています。より多くの人たちが亡くなったと考えられる西郷軍のお墓は殆ど見られません。この長昌寺の裏手に一基見る事が出来ます。

この長昌寺の裏手の墓地の一角に多くのキリシタン墓も残されています。江戸時代はキリスト教が禁止されていましたので、お墓も一見仏教徒のお墓のように作られています。よく見るとキリスト教のお墓には、いくつかの特徴がある事がわかります。

一、お墓の上部に「烏八臼（うはきゅう）」の文字が見られます。

一、お墓の下部に「七つの福音（七つの秘跡）」と呼ばれる七本の筋が見られます。

一、上から見ると十字に見えます。（眞信（しんしん）墓・斗枡（とます）墓）

一、台石のどこかに十字が隠されています。

このようなお墓があればキリスト教との関連を調べて見るのもおもしろいと思います。

烏八臼の文字

七つの福音（秘跡）

十字の形（眞信墓）

五、八幡河原庚申塔群

私たちは八幡河原の庚申塔群を訪ねました。ここには三五基の庚申塔があります。地区境、田畑の境、辻々、橋の袂にあったものを移したものです。造立庚申塔、文字庚申塔があります。

昔は村に病気や禍が入ってこないように守って貰う意味で作られました。江戸後期には庚申信仰が広まり各地に庚申講が催される様になりました。古い形の物は逆三角形をしており地面にそのまま突き刺していました。

このように宇目には多くの庚申塔が残されています。

六、切利支丹柄鏡

私たちは八幡河原から小野市へ、さらに三二六号線を南下、日の影線に入り田原から中岳方面へ進みました。

トンネルを越えた所の中岳地区の佐保さんのお宅に、ご先祖から伝わる切利支丹柄鏡が残されています。

昭和三十四年に大分大学の先生から確認していただき県指定有形文化財に指定されています。

切利支丹柄鏡

この柄鏡は江戸中期の物ではないかと言われています。材質は青銅製で全体の長さが二〇センチ、柄の長さが八・五センチ。鏡の直径は一一センチ程あります。中心部には〇に十字が入った印があり、上下に文字らしきものが刻まれています。この文字について全国隠れキリシタン研究会では、上の文字は「神・天」を著す鳥居のマーク、中央の〇に十字は田地の意味を表す「地」の印、下の文字は印鑑文字で使われる「人」ではないかと言っています。「天」「地」「人」の三文字と読み解き、キリスト教で言う「父と子と聖霊」三位一体を著しているのではないかと説明しています。

佐保さんの話では申し伝えもなく、書かれている文字の意味も分からないそうです。当時、藩主（岡藩主中川氏）が木浦鉱山に行く時の殿様道であったと言うこと、岡藩の駕籠掻きをしていた人が住んでいたらしいという話があるそうです。この柄鏡には「天下一上村大和守」の銘が彫られています。

この柄鏡を拝見した後、里の駅「木浦名水館」に行き木浦鉱山から産出している鉱物を拝見、帰途につきました。